

金子洋文と藤田紫橋との俳句論争について

天 雲 成津子*, 綿 抜 豊 昭**

Published debate regarding haiku between Yobun Kaneko and Shikyo Fujita

Setsuko TENKUMO, Toyooki WATANUKI

抄録

金子洋文は大正、昭和にかけ、文学、演劇、政治と異なる分野で活躍した人である。雑誌『種蒔く人』を小牧近江と共に創刊、プロレタリア文学運動の興隆に寄与、その後継誌でも中心的な役割を果たし、プロレタリア文学の中樞の役割を担ったことなどで、評価されている。

しかし従来の研究では、金子が数十年以上も句作りをし、晩年に句集『雄物川』を刊行していた俳人としての側面もあったことは着目されていない。そこで、本稿では金子と俳句との関わりについて、注目すべき論争について述べる。

昭和10年1月1日の秋田魁新報に掲載された金子の句に、秋田の俳人藤田紫橋が批判し、誌面上で金子と藤田の間で論争が展開された。その内容を分析した結果、金子の当時の俳句についての知識の低さが明らかになった。また、その後、45年間も俳句を公表しなかったことから、この論争が、その後の俳人としての金子洋文に与えた影響は大きかったと考えられ、金子と俳句の関わりにおいて重要な論争であったと位置づけられる。

Abstract

Yobun Kaneko was a novelist, dramatist and politician of the Taisho and Showa periods. He contributed to the beginning of the Japanese proletarian literature movement by publishing a magazine called Tanemakuhito with Omi Komaki. He also had a key role in publishing its successors and was recognized for these works.

It is less well known that he wrote haiku poems over several decades, and published a haiku collection titled Omonogawa in his later years. Therefore we focused on his involvement with haiku and investigated a significant incident involving one of his haiku poems.

Shikyo Fujita, who was a haiku poet in Akita, criticized the poem in Akita Sakigake Shinpo on January 1, 1935. Kaneko and Fujita started a debate over haiku in the magazine. It is apparent from our review of Kaneko's contributions to this debate that he had only a poor knowledge of haiku at that time. Kaneko did not publish any more haiku poems over 45 years after this incident. This fact and our analysis of the debate indicate that it had a substantial impact on Kaneko as a haiku poet.

* 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程
Doctoral Program

Graduate School of Library, Information and Media Studies,
University of Tsukuba

** 筑波大学図書館情報メディア系

Faculty of Library, Information and Media Science,
University of Tsukuba

はじめに

一八九四年に秋田県南秋田郡（現在の秋田市）土崎港古川町に生まれた金子洋文（一八九四—一九八五）は、文学史上、小牧近江と共に雑誌『種蒔く人』を創刊してプロレタリア文学運動の興隆に寄与したことや、プロレタリア文学の中核の役割を担った『種蒔く人』の後継雑誌『文芸戦線』、『文戦』、『レフト』、『新文戦』で中心的役割を果たしたことで評価されている。また、地域史においては、劇作家等の活動をしてきたことから、「秋田出身の文化人」として評価されている。

しかしながら、全国的なプロレタリア文学関連の事蹟等についての研究に比して、秋田という地域とのかかわりを中心とした文化人としての事蹟等の研究は十分に進んでいないといいたい。殊に俳人としての活動等については、まったくおこなわれていないといって過言ではあるまい。

俳人としての金子について論じるにあたって、まず注目すべきは、一九三五年、藤田紫橋とのあいだでおこなわれた「俳句論争」と考えられる。なぜなら金子が俳句を嗜んでいることがはじめておこなわれたものであり、さらに当時の金子の俳句知識がうかがわれるからである。

そこで本稿では、二人のあいだでおこなわれた「俳句論争」について分析し、当時の金子の俳句知識について考察したい。

一 秋田地方の俳人

秋田地方は、江戸時代から俳諧を嗜む人が少なからずおり、吉川五明（一七三〇—一八〇三）といった有名俳人がでていた。藤原弘編『江戸時代秋田の俳人たち』（加賀谷書店、一九六六年）によれば、文化・文政期（一八〇四—一八三〇）に大阪で発行された俳人名簿である『万家人名録』及び『万家人名録拾遺』には一九六名の秋田の俳人名が掲載されている（一頁）。この二百名近くの俳人がいるという状況は、明治維新後も大きく変化することはなかったようで、千葉三郎著『俳星』明治版の軌跡（北門文学会、二〇〇二年）には、『俳人名簿』（俳書堂、一九〇九年）によって秋田県の俳人数を一八七名としている（二四〇頁）。また正岡子規から撰された誌名と揮毫した題字を掲げる俳誌『俳星』も発行されて

いた。子規の高弟である河東碧梧桐は、一九〇六年八月六日から翌年の十二月十三日までの間、東北地方他を旅行しており、秋田には百十二日間滞在している。そのおりの紀行文『三千里』には

そは兔に角、羽後の俳人の多いことは恐らく全国に冠たるものであろう。町として俳人のおらぬ処は殆どない。おれば大抵十名内外の団体がある。雄勝郡の俳句は三梨に起り、由利郡の俳句は追方に萌した。三梨、老方とも山中の一僻村である。

と記している（註1）。

また秋田の俳人としては、新聞「小日本」の記者であり、子規門下の四天王の一人と目されていた石井露月（一八七三—一九二八）、「秋田魁新報」初代社長で郷土史・俳句研究でも著名であった安藤和風（一八六六—一九三六）らの活動が注目される。

金子は二十二歳まで（東京で見習い工として働いた十四歳からの二年を除く二十年間）こうした秋田に育ち住んでいたが、宗匠について俳句を学んだという記録は残っていない。貧しい家に生まれ、生活におわれていた金子には、秋田で俳句を学ぶ余裕はなかったと思われる。また、上京後も俳句の結社などに属した形跡はない。当然、俳句雑誌に金子の俳句が載るなどといったこともなかったため、秋田の俳人たちに特に注目されることはなかった。そうした金子の俳句が、秋田の俳人に注目されたのは、一九三五年一月、金子四十一歳のときのことである。

二 「秋田魁新報」一九三五年一月の俳句論争

(一) 藤田紫橋の批判

一九三五年一月一日付「秋田魁新報」に、「元日や東海道の昼寝かな」と題された、金子洋文の随筆が掲載された。それに対し、一九三五年一月十三日付・同十五日付「秋田魁新報」に「文士の句その他」（上・下）と題された、金子の俳句「元日や東海道の昼寝かな」に対する批判文が掲載される。批判したのは藤田紫橋で、秋田近代文芸史研究会編『秋田文芸人名録稿』（秋田近代文芸史研究会、一九七〇年）によれば、本名を栄太郎といい、一八九九年四月一日生まれである。

『秋田文芸人名録稿』に採録されたのは、「秋田魁新報」の川柳欄を担当していたことによるもので、これまで文学的業績について注目されたことはない。今日までその名が残るほどの業績を残さなかったとみることもできよう。

さて、「文士の句その他」で藤田が問題としたのは「季語」と「切れ字」のことである。周知のように、俳句には次の基本的な三つの約束事がある。

第一が定型であること、すなわち十七音であること。

第二が季語を必要とすること。

第三が切れ字を必要とすること。

この三つはまず注目される点であり、そのうち二つにかかわることを、藤田が問題としたのである。

(二) 季語について

藤田は、まず季語については以下のように述べている。

「元日」は「新年」であり「昼寝」は「夏季」に属するからだ。俳句の世界では「季重なり」を非常にきらふのである。これは一句の潔癖性の上からばかりでなく、俳句は「季語」を重んずることにおいてその重要な構成要素とするからである。

(中略)

「季重なり」も実に甚だしき「新年」と「夏季」との間隔的矛盾(妙な言ひ方だが……)を平気で敢てしてある。放胆といふには余りにも無智な……と叱りつけたい。

藤田が指摘したのは、いわゆる「季重なり」で、これは一句の中に季語が二つあることをいう。

「季語」は、「季」をどのように示すかによって、次の三つに分類できる。

一つめは、「春」「夏」「秋」「冬」と明示されているもので、たとえば「春の風」といったものがあげられる。

二つめは、客観的事実として「季」が定まるもので、たとえば「紅葉」といったものがあげられる。

三つめは、習慣や約束として「季」が定まっているもので、たとえば「月」はいかなる季節にも鑑賞することができるが「秋」のものと定められている。

藤田が季語とした「元日」は、右の二つめの季語で、客観的事実として「新年」のものである。また「昼寝」は、三つめの季語にあたり、「夏」のものである。この二つは、たとえば、当時の俳句鶯声会編『俳句の作り方』(国華堂書店、一九一八年)、今井柏浦編『新校俳諧歳時記』(修身堂、一九二九年)、石野観山編『俳諧歳時記』(成光館書店、一九三四年)のいずれにも「新年」と「夏」の季語としてとりあげられている。それが一時的なことではなく、現代まで受け継がれていることは、山本健吉編『季寄せ』(文藝春秋、一九七三年)、稲畑汀子編『ホトトギス新歳時記』(三省堂、一九八六年)と、現代を代表する俳人の編んだものにも採られていることからうかがえよう。

このように「元日」も「昼寝」も、ごく一部の俳人が使用する目新しい季語ではなく、周知の季語であり、この二つを季語としてとらえれば「季重なり」である。

藤田は「俳句の世界では「季重なり」を非常にきらふのである」と述べているが、確かに「嫌う」俳人は存在したようで、たとえば加藤美侖著『社交要訣』は心得おくべし(誠文堂、一九一八年)には「俳句を作るには季節の言詞を入れるといふ事を心得ねばならぬ」(一一一頁)「季の詞を入れるといつても、之れが重なる素人発句となる」(一一二頁)「僅か十七文字の間にそんな死んだ詞があつては駄句とならざるを得ん理である」(一一三頁)とある。

(三) 切れ字

次に藤田は「切れ字」を問題とし、以下のように批判する。

わが洋文氏の一句では「元日や」と先づアタマに感嘆詞を置いて、「昼寝かな」と結句にも感嘆詞をおいてあるが、これはわが定型派俳人の仲間では「や」「哉」といつて非常に忌みきらふことにしてある。

連歌、俳諧で句の「切れ」は重視され、「切れ字」についても重視されている。現代でも、「切れ字」を特にとりあげた、高浜年尾監修、大木葉末著『作句と鑑賞のための俳句切字論』(清水弘文堂、一九七七年)が出版されている。

「アタマに感嘆詞」「結句にも感嘆詞」とのべたのは、俳句は短詩型文芸である

から、内容を盛りだくさんにするのはよくない、とされる。従って、「や」の付いた「元旦」が眼目なのか、「かな」の付いた「昼寝」が眼目なのかがわからず、感動の中心が曖昧だといっているのであろう。

また「や」「哉」といって非常に忌みきらふ」については、ほぼ同時期に刊行された松本仁著『俳句文法六十講』（立命館出版部、一九三二年）に、

や……かなは、伝統的に俳句の世界に於て嫌悪されつゞけてある。

とある（二七七頁）。「や」「かな」の二つの切れ字を一句に詠むことを嫌う俳人がいたことも事実である。

(四) 藤田の立場

形式的な俳句の世界では、何を詠みたいかを明確にするために、季語や切れ字の詠み方は注意がはられる。たとえば俳句入門書として著された石田一位著『俳句の作り方・学び方』（北辰堂、一九五九年）など、俳句の詠み方の入門書の類で、必ずといってよいほど説かれるところである。

しかし、俳句をはじめた人にしてはいけない、というのはあくまでも初心者向けのテクニクであつて、本来、いい句になれば、そうした原則を守らなくても問題とされない。

藤田紫橋は、「放胆というには余りに無智な……と叱りつけない」とし、「麴麴屑」ほどに軽蔑して俳句をつくること勿れと戒めんがため」にこのようなことを述べたとしている。この言い様は、藤田のほうが金子よりも年上か、立場が上であるかのようなのである。先にのべたように、藤田は一八九九年四月一日生まれであり、金子より五歳年少であることから、論争時の姿勢は高圧的なものといえよう。

金子は「秋田魁新報」（一九三五年一月二日）の反論記事「春場所や勝からのぞく腹が波たつ」の出だしで

藤田さんといふ方はどんなにえらい俳人であるか未だ俳句に接しないので何とも申し兼ねるが、…（略）…よほどえらい俳人らしい。

と記しているのが、藤田については知らなかった。もしくは知らなくてもおかし

くない程度の人とみていたとされる。しかし、藤田は、金子のことを知っており、ここで俳句宗匠的な立場で、金子洋文を目下のように扱い、初心者向けの批判をしているといえよう。

三 金子の反論

藤田の批判に対して金子はすぐに反論した。それが「秋田魁新報」に掲載されたのは一月二十二日のことである。自分の句は川柳だから、「季重なり」も「切れ字」も問題ないと反論した。「春場所や勝からのぞく腹が波たつ」と題された文中で、次のように述べている。

だが、（元旦や東海道の昼寝かな）を俳句と見なされたことが、僕の失策であると言へば言へる。なぜなら僕は一年に千あまりの川柳をつくることはつくるが俳句なぞつくつたことにはない、だから季題や定型律もへつたくれもないのである（俳句の方でも僕はくだらんことだと思つてゐる）だから感嘆詞が二つ重ならうと三つ重ならうとお構ひなしだ。川柳であるつもりものを、俳句扱ひされたのがむしる迷惑至極で、折角頭のいゝところを披見なすつた藤田さんにお気毒な次第だ。

『大辞泉』（小学館、一九九五年）「川柳」の項に、

江戸中期に発生した雑俳の一。前句付けの付句が独立した一七字の短詞で、その代表的な点者であった初世柄井川柳の名による。季語や切れ字などの制約はなく、口語を用い、人生の機微や世相・風俗をこつけいに、また風刺的に描写するのが特色。川柳点。狂句。

とあるように、俳句における切れ字・季の制約がないものを川柳とする。しかし、金子の句は、それを題とした随筆を読む限り、川柳ではないと思われる。以下、その点をみていきたい。

一九三五年一月一日付「秋田魁新報」に掲載された金子洋文の随筆「元旦や東海道の昼寝かな」によると、相撲稽古の帰りに、省線電車でうつらうつらしているときに「元旦や東海道の昼寝かな」という句が浮かんだ。この句が浮かんだ背

景を、金子洋文は以下のように説明している。

この正月は、新派が大阪歌舞伎座で上演する「母の土産みやげ」といふ芝居の演出で、大阪へ行かねばならぬことになったからである、行くとする、三十日の夜出発、だから(元日や……)では嘘つぽつちだが、大晦日の東京を逃げ出して、東海道の列車の中で昼寝をするのも、悪くない、といった感じが、ふと十七字となつてうかんで来たのだ。

それのみではない。

私は今、昭和十年度を如何に生活すべきか、その仕事や気持の上のプログラムを予定してゐる。それは、相変らず險阻多難な生活と思はれるが、仕事に熱中して愚痴はいはん、といふ心構へである、愚痴をいふ暇があつたら、昼寝をせう……さういふ気持が、この句に幾分出てゐるのであるまいかと考へられる。

これによれば、「元日や」の句が詠まれたのは、「東海道の列車の中で昼寝をするのも悪くない」という思いと、「愚痴をいう暇があつたら昼寝しよう」という思いがあつたことになる。今の「感じ」「気持ち」が十七字で浮かび、それが随筆執筆に用いられたということになる。元日の紙面に載るものであることを考慮し、「一年の計は元日にあり」といわれるように、年のはじめに今年目標を述べたものである。

つまり、「元日や」と「や」をつけて強調したのは、元日の誌面に載るからであつて、句だけからは不明だが「昼寝かな」と「かな」をつけて強調したのは抱負を述べているためで、年賀状の常套的な表現「新年あけましておめでとうございませう、本年は愚痴をいわず、がんばります」のような、新年の挨拶を述べたものである。

川柳の定義は諸説ある。切れ字、季がなければ「川柳」とするのであれば、金子の句は、切れ字も季もある。川柳を、人情世帯をうがった内容を持つものとするれば、金子の句は自分の抱負を述べたもので、人情世帯をうがったものではない。形式的にも内容的にも金子の句は俳句である。

とすればここで金子が「川柳」がいかなるものかの理解が足りなかつたことが

露呈するのである。

(五)

四 藤田の批判の問題点

(一) 季重なり

藤田の批判は、先にのべた俳句を詠むにあつた三つの約束事を重視する俳人にとっては肯定できるものであつたと思われる。しかし、問題点がないわけではない。

藤田は「季重なり」を指摘するが、それをよいか、ならぬかは別問題である。芭蕉の句には「季重なり」の句が多いが、芭蕉の作品を間違ひだらけとはいわない。芭蕉の親友とされる山口素堂の「目には青葉山ほととぎす初鯉」は季語が三つもあるが、間違ひのある句の例として引用されることはない。「季重なり」はよくないとする俳句の世界」では「嫌う」だけのことである。たとえば、伊東月草著『俳句の考へ方と作り方』(考へ方研究会一九二七年)に

一句の中に、定められた季語が含まれてゐるからといつて必ずしもその句が季感を伴ふといふわけのものでもなく、又定められた季語が取入れてないからといつて、必ずしも季感の出ないといふわけのものでもない。

とあるように(七二頁)、季語の有無といった形式面ではなく、その句全体であらわされる季感を重視する俳人もいる。

また前掲『社交要訣』(是丈は心得おくべし)にも

同季の景物を重ねてもよい場合もある。その二つの同季の景物が、いづれ劣らず相並び相俟つて一首の趣きを成すとか、或は一方が主となり、一方が客となつて妙趣を現はすやうな場合には差支がない。

とあり(一一三頁)、「季重なり」を全面的に禁止してゐるわけではなく、内容によつてはよいとする。

また「元日」は客観的事実であるから明らかに「新年」の季語であるが、「昼寝」は習慣的な季語である。同じ習慣的季語「月」は、「春の」を付せば秋の季語ではなくなる。「昼寝」も夏だけに行われるものではない。「昼寝」を夏の季語

として用いられ、夏の昼は暑いので、そうした時間帯に活動するのを避けて寝る、ということの季節感をともなうが、季語という意識がなければ、「新年の昼寝」でも問題は生じないということである。たとえば以下のような句も詠まれている。

皆ひとの昼寝のたねや秋の月 貞徳

よき知らせ冬の昼寝をしておれば 細川加賀

冬晴れや朝かと思ふ昼寝ぞめ 日野草城

(二) 切れ字

三田村熊之介著『発句の葉』（発行者石塚猪男蔵、一八九六年）には「寓言体」の用例として

夕顔や秋はいろく／＼のふくべかな

という芭蕉の句を例にあげている（二三頁）。「や」「かな」を含んでいるが特に問題としていない。また同書には

或人の

奪ひあふてすり殺したる虫哉

の句の如きは。殺風景の極にして殆んど風雅の痕迹をも留めず。しかるに、

五月雨や火の雨まじる虫かな

などいへばいかにも風雅に聞ゆ。同じ詩料にても意匠のつけ方によりては高尚とも卑俗ともなるべし。

とあり（二七頁）。「や」「かな」があるにもかかわらず、「風雅に聞ゆ」としている。このように「や」「かな」を問題としない人もいたのである。

以上のように、藤田の批判が全面的に正しいわけではなく、「嫌う」か否かの問題であり、金子に俳句の知識が十分にあれば、「川柳であるから」といった応じ方をしなくてもよかったのである。

五 俳句論争の周辺

(一) 藤田紫橋

昭和十年元日の「秋田魁新報」の新年川柳（社選）の片隅に「おわび」が掲載されている。

新年川柳は平素の当句に三倍以上の応募ありましたが質に於ては却つて見劣りするものあり入選したのも甚だ選者の意に満たぬものでした。なほ歳末繁忙に際し熱心な熱心な投句ハガキの一部が紛失したり明瞭に「新年川柳」と記入しないため他に紛れ込んだものが多い模様で此の点深く投句者諸君にお詫び申上げます（三泥子）

更に、新年川柳の欄内には、「川柳交互選」を予告したものがあつた。

さきがけ川柳も今年で足掛け五年になりました。しかし有力な指導者を得られなかつたため、兎角進歩が遅々たるものあり一種のマンネリズムに陥つたかたちでありますそれで本欄の投句者中もつとも句作態度のしつかりした左記三氏のお力を借り交互選をやつてみたいと存じます。

三泥子は藤田紫橋の柳号であるが、いかに句作態度を重視していたかを伝えている。金子の句への藤田の批判は、「文士の句その他」という題、十五日にある「俳句は余技か」という副題から、金子の俳句について、技術的なことからならぬながら、実は文士の句の態度にも物申したかつたことが大きかつたといえる。

(二) 金子洋文

一月二十二日の金子の反論に、二十六日、二十七日、再び紫橋が「續文士の句其他」という、金子の反論記事に掲載した句についても批評を追加し、

「金子洋文よ出直せく」だ

という言葉で終わっている。二月十四日、金子は「俳句か川柳か——藤田君に答

へる」で

本紙の迷惑を慮ばかつて、この論争は打ちきらうと思つてゐたのが方々から(俳句と川柳とどちらがふか)ときかれるので、簡単に藤田君に答へることにした、

という文から始まる応答がある。文中、藤田に「御高見多謝!」といいつつも「僕の句に対して、満点をつけたり零点をつけたりするほどの、おえらい人かどうか」と問いかけ、川柳と俳句の形にこだわることより、「それぞれの本質を見失ふことなしに、一切の規定や束縛を無視して、如何に現実の生活を、芸術的に表現する」ことの立場にあると主張した。また川柳をはじめて十年であり、発表した句が二十句ほどの川柳子であると自らについて述べている。

金子は藤田の批判に応じたものの、金子洋文著『雄物川』(金子洋文米寿記念刊行会、一九八一年)のあとがきによれば、安藤和風に「金子君は俳句を知らんよ」といわれたという。自らの俳句の理解不足を認識したためか、その後、長らく私的に俳句を詠むことはあつても、おおよけに発表することはなかった(註2)。俳句に関するものをおおよけにしたのは、論争から四十五年後の一九八〇年のことで、「秋田魁新報」に「俳句随筆」を連載した。俳人としての金子を考へるとき、紫橋との論争は、結果として、公的な場での俳句に関する発表を四十五年もの長きにわたってさせなかったという意味で注目される。

おわりに

本稿は、一九三五年、金子洋文が「秋田魁新報」紙上に公表した俳句を契機に、金子洋文と藤田紫橋とのあいだでおこなわれた「俳句論争」について、両者の主張を分析することによって、当時の金子洋文の俳句に関する知識の低さを明らかにした。また、四十五年間、金子洋文が公的な場での俳句に関する発表をしていない理由を、この論争にもとめられることを述べた。俳人として金子洋文を考へるにあたって、この論争は、まずおさえなければならぬ重要事項であり、その意味で、本研究は意義のあるものである。

今後の課題としては、先の論争の四十五年後にまとめられ『雄物川』の内容分

析等をおこない、金子洋文の俳句の特質について明らかにすることがあげられる。(七)

【註】

- 1 本文は『三千里(下)』(講談社、一九七三年)による。
- 2 金子がおおよけにしなかった俳句等を記したノートについては、拙稿「金子洋文の俳句」(『短詩文化研究4』二〇一一年三月)を参照されたい。

参考文献

- 1 藤原弘編(一九六六年)『江戸時代秋田の俳人たち』(加賀谷書店) 一三五頁
- 2 足達矩水他著(一九六九年)『秋田俳諧史』(秋田俳文学の会) 一七三、一九頁
- 3 千葉三郎著(二〇〇二年)『「俳星」明治版の軌跡』(北門文学会) 二五九頁
- 4 河東碧梧桐著(一九七三年)『三千里(正)』(下) (講談社) 三三四頁
- 5 秋田魁新報社編(一九七四年)『秋田人名大事典』(秋田魁新報社) 四六八頁
- 6 秋田近代文芸史研究会編(一九七二年)『秋田文芸人名録稿』(みしま書房) 一七〇頁
- 7 金子洋文著(一九八一年)『雄物川』(金子洋文米寿記念刊行会) 一六五頁
- 8 秋田魁新報社(一九三五年一月一日〜同年二月末日)『マイクロ・フィルム版秋田魁新報』(秋田魁新報社)より
昭和十年一月一日「元日や東海道の晝寝かな」
「新年川柳(社選)」、一月十三日・十五日「文士の句その他」、一月二十二日「春場所や勝からのぞく腹が波たつ」、一月十五日「俳句は餘技か」、二月十四日「俳句か川柳か」藤田君に答へる」

(平成23年6月30日受付)

(平成23年10月11日採録)